

# 英語と日本語の名詞句の長さの比較—— なぜ英語の関係代名詞節は 日本語に直訳すると不自然になるのか

小川 明

0. この小論では、英語と日本語の名詞句について、長さという観点から比較してみたいと思う。その出発点として、英語の関係代名詞節の和訳を考えてみることにする。

安西 (1995; 2000) の翻訳論は言語学の観点からも興味あるもので、大変すぐれたものであると思う。安西 (1995) は、関係代名詞節をそのまま和訳すると不自然になる場合が多いことを指摘する。いくつか例をあげよう。(a) は安西による直訳、(b) は安西による翻訳である。ただし (1c) は (1a) の直訳表現をそのまま用いて (1b) に倣って小川が作ったものである。

- (1) A great many Americans who had never paid much attention to Japan, and probably would have gone through life ignorant of and uninterested in Japan, were required to take notice when the war came.
- a. 日本には大した注意は一度も払ったことがなく、おそらく日本については無知で興味のないまま生涯をすごしていたであろう非常に多くのアメリカ人は、戦争がきた時、注意せざるをえなくなった。
  - b. 大部分のアメリカ人は、日本のことなど大して注意をはらったこともなく、そしておそらくは、日本のことなど何も知らず、興味もないまま生涯を終っていたにちがいない。ところがそういうアメリカ人も、戦争になってみると、いやでも日本に注目せざるをえなくなったので

ある。

- c. 非常に多くのアメリカ人は、日本には大した注意を一度も払ったことがなく、おそらく日本については無知で興味のないまま生涯をすごしただろう。ところがそういうアメリカ人も、戦争がきた時、注意をせざるをえなくなった。
- (2) Let us not neglect as we grow older the pleasure of re-reading books which we remember we liked when we were young, but which we have mostly forgotten and which we should like to read again.
- a. 齢を取るにつれて、若かった時に好きだったと覚えている、しかしほとんどは忘れており、そしてもう一度読んでみたい書物をもう一度読む楽しみを大切にしよう。
- b. 齢を取るにつれて、昔読んだ本をもう一度読み返してみる楽しみを大切にしたいものである。若い頃に好きだったことだけは覚えていても、内容はほとんど忘れてしまっていて、もう一度読んでみたいと思っような、そんな本を読み返すことにはまた格別の楽しみがあるものだ。
- (3) There are plenty of races at the present day who have fully developed languages in which they can express everything that is in their mind, but who have no system of writing.
- a. 現在、心にあるすべてのことを表現できる十分に発達した言語をもっているが、書く組織をもたない多くの種族がいる。
- b. ある種の種族は、十分に発達した言語をもち、考えることはすべて口頭では表現できるにもかかわらず、表記のシステムだけはもっていない。しかもこうした種族の数は、今日でもけっして少なくないのである。
- (1)を比較してみると、(1b)が一番自然であるが、(1c)でもかなり読みやすく、直訳っぽい言い回しが問題ではなく構造のほうが重要な問題であるこ

とがわかる。(1)－(3)を通じて(a)より(b)のほうがはるかにわかりやすい。

1. 安西(1995: 88)はこの現象に対して、次のように述べる。

多少でも翻訳を試みたことのある人なら、誰しもかならず思いあたることだろうが、この関係代名詞という代物、いちばんの難物である。英文和訳の原則からすれば、関係代名詞のみちびく節を、そのまま先行詞の前にもってくればコトは終るはずだけれども、しかしこれでは、日本語として、ほとんど理解不可能な文章になってしまうことも少なくない。

そしてその原因を英語が名詞中心の性格が強いのにに対して、日本語は動詞中心であるという言語の性格の違いにあるのではないかと推理している(安西(2000: 50))。下線は筆者。

英語を日本語に翻訳していて、いちばん頭を悩ませる難題の1つがこの関係代名詞であることは、少しでも翻訳を試みたことのある読者なら先刻御承知のはずだと思う。いや別に翻訳の経験などまったくなくても、もし英語に名詞中心の性格が強いとすれば、その必然的な結果として、関係代名詞という問題がでてくることは容易に理解できるはずだ。英語は名詞を焦点として文章を構成してゆくからこそ、その核としての名詞に、長い修飾語句を関係代名詞でつなぎとめるということもできるのであって、それが英語の文章構成法の生理に合うのである。

ところが、日本語は動詞を中心にして文章を組み立ててゆくから、関係代名詞を英文解釈式に直訳して、ただ名詞の前に長い修飾句としてくっつけただけでは、日本語の骨組みに過重な負担をかけてしまう。いわば、生理的に拒否反応を起こしてしまう。

安西は、この指摘は別に目新しいことでなく、すでにたびたび言われてきたことであることわり、外山(1972)の例をあげている。

西欧の言語が名詞中心構文であるのに、日本語は動詞中心の性格がつよい。「この事実の認識が問題の解決に貢献する」というのが名詞構文なら、「これがわかれば問題はずっと解決しやすくなる」とするのが動詞構文である。翻訳においては、語句の翻訳だけでなく、こういう名詞構文→動詞構文の転換も必要である。

2. 翻訳の場合は自然な日本語が要求されるので、翻訳する人たちはなんらかの技術を用いてこの不自然さを解消していく必要がある。どのようにやるのであろうか。安西(1995)が提案している方法は、

1 適当な接続詞を補って訳す。

She solved in five minutes a problem that I had struggled with for two hours.= She solved the problem in five minutes, although I had struggled with it for two hours.

問題を解くのに私は2時間も苦しんだが、彼女は5分で片づけてしまった。

2 いったん切る

She had an adopted child who she says was an orphan.

彼女には養子がいる。彼女の言葉によると、孤児だったのだという。

3 分解する

This is one of the few really good books that have been published on this subject.

(直訳) これは、この問題について出版されている少数の本当によい本の1つである。

原文を次のように直して訳す。

Only a very few really good books have been published on this subject, and this is one of them.

この問題については、本当にすぐれた書物はごく僅かしか出ていないが、本書はそのうちの1冊である。

#### 4 解体する

Television has not yet been applied to all the uses which will be found for it.

テレビは、現在も多くの用途に用いられてはいるけれども、将来はまだまだほかに応用範囲が見つかるだろう。

すべて何らかの形で関係代名詞節を連体修飾節に対応させるのを避けている。つまり関係代名詞節を修飾要素としないで、先行詞と合わせて1つの文にしてしまうのである。

3. ここですこし脱線をして、池上(1981)の考え方に触れておきたい。池上は次のように言う。この指摘は安西(2000: 63-67)に喚起された。

英語はむしろ<もの>を<こと>から取り出して露呈する。関係代名詞の構文をこの観点から考えてみると興味深い。例えば、ある書物から取った次の英文 a を日本語に訳した場合、日本語の表現として b と c のどちらが自然に感じられるであろうか。

(142) a Do you know of the millions in Asia that are suffering from protein deficiency because they get nothing but vegetables to eat ?

b 手ニ入イル食物ト言エバ野菜バカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルアジアノ何千万人ノ人タチヲ知ッテイマスカ

c アジアノ何千人トイウ人タチガ手ニ入イル食物ト言エバ野菜バカリノタメ、蛋白質不足デ苦シンデイルコトヲ知ッテイマスカ

b は英語の構文を直訳的に再現した<もの>的な言い方——つまり、出来事の中から、<知る>の対象として<アジアの何千万人>という<もの>を取り出して、それに残りの部分を修飾的な叙述として結びつけた言い方——である。一方、c は出来事そのまますべてを1つのまとまりとして、1つの節の形で表した<こと>的な表現である。日本語の表現としては c

の方が自然であるのは言うまでもないであろう。このことはまた逆に、なぜ日本語では関係代名詞が発達しなかったという問いに対して答えの手がかりを与えてくれる。関係代名詞は典型的な<もの>的な構文を作りだす。これは<こと>的な表現への指向性の強い日本語の性格とは合わないのである。

池上の説明は日本語と英語にまたがることであるが、福地(1995)は英語の内部においても統語上関係節構造でありながら意味上はthat節である場合があり、文として解釈されなければならない可能性があることを論じている。次は福地(1995: 27-28)の例である。英文と日本語訳を比較してください。(4b)では、もし…with the exception of one Marine unitで文をとどめると、one Marine unitは多国籍軍の海兵隊部隊であるにもかかわらず、イラク側の部隊になってしまう。

- (4) a. 69% of the people surveyed said that they would like to "slow down and live a more relaxed life," compared with only 19% who said they would like to "live a more exciting, faster-paced life." (Time)

調査を受けた人の69パーセントがゆったりしてもっと気楽な生活をしたと言ったのに対し、わずか19パーセントがもっと刺激のある、活気に満ちた生活をしたと答えた。

- b. Norman Schwarzkopf, the allied commander, said resistance had been light, with the exception of one Marine unit that ran into and repulsed an Iraqi counterattack. (Time)

多国籍軍司令官ノーマン・シュワルツコフは、海兵隊の一部隊がイラク軍の反撃に遭遇し、これを撃退したのを除けば抵抗は少なかった、と言った。

また逆に日本語から英語への翻訳のなかで、必ずしも日本語の連体修飾節と英語の関係代名詞節が対応していないこともよく見受けられる(小正(1989))。

- (5) a. 向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。

(川端康成『雪国』)

A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura.

(サイデンステッカー訳)

- b. 明りをさげてゆっくり雪を踏んできた男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

(川端康成『雪国』)

The station master walked slowly over the snow, a lantern in his hand. His face was buried to the nose in a muffler, and the flaps of his cap were turned down over his ears.

(サイデンステッカー訳)

4. それでは本題に戻ることにする。本稿では、どうして関係代名詞節をそのまま訳すと不自然な日本語になってしまうのか、その原因が何なのかを二つの言語における構造の違いに注目することによって検討してみたい。そして安西の優れた翻訳論に少しでも言語学の立場から説明を与えることが出来れば幸せである。

安西 (2000:13) は

つまり本書は、あくまでも翻訳の現場からという立場に立って、具体的に翻訳のプロセスを点検し、そこでどんな転換が必要となるかを見ることによって、できればそこから対照言語学的に、日本語と英語の発想の対比を引き出してくれることを狙いとしている。

というのであるが、逆に、ここでは日本語と英語の間の言語上の違いからその対比を導きだしてみたいのである。

その前にひとつ頭に入れておかなければならないことがある。じつは英語の関係代名詞節に対応させられている連体修飾節表現が前者とは必ずしも一

致しないことが過去の研究で明らかになっている。寺村(1992)によれば、連体修飾構造は[内の関係]と「外の関係」に分類されるが、英語の関係代名詞節は「内の関係」に対応している。その他英語の関係代名詞節と日本語の連体修飾節の比較については、Matsumoto(1989), Murasugi(1991), 加藤重広(2003)、川平芳夫(2004)などが考察している。そこでは関係代名詞節あるいは連体修飾節とそれが掛かる名詞との関係の違いが考察の対象になっている。

しかしそれとは別の違いが英語の関係代名詞節と日本語の連体修飾表現の間には存在するのではないか。その性質が関係代名詞をそのまま和訳する時、ある不自然さを生じさせるのではないか、それが何なのであるか本稿で模索してみたい。

5. いままでの翻訳上の問題から推理して次のような仮説を立ててみよう。これはすでに引用した安西(2000: 50)の下線部を土台にしている。

(6) 英語では、名詞を修飾する要素は長くなることが可能であるが、日本語では、名詞を修飾する要素は短くしなければならない

これを土台に調べることにしよう。まず最初に、なぜ英語の名詞には長い修飾要素がくっつくことができるのであろうか。注目すべきことは、日本語は前位修飾のみであるが、英語では、前位修飾だけでなく後位修飾も可能であることである。それぞれ長さの観点から調べてみよう。まず英語においては、名詞句において前置修飾が長くなることを避ける傾向が顕著に見られる。Biber et al. (1999: 597-598)によれば、前置修飾の70-80%は修飾要素はひとつである。二つ修飾要素がつくのが20%で、3ないしは4つ修飾要素がつくとわずか5%になる。この理由は要素間の論理関係を推測しなけばならず、読み手と聞き手にとって重荷になるからであるという。たくさんの前置修飾要素の場合、すべての要素が直接名詞を修飾することはあまりなくて、

ある要素は別の前置修飾要素を修飾している。以下の例では[ ]で示す。もし[ ]を1つと数えると、それだけ修飾要素の数は減ることになる。

- (7) a. **new** trousers  
b. **official** negotiations  
c. **funny whistling** noises  
d. **settled legal** practice  
e. **genuine, nonstrategic legal** rights  
f. [**high sulphur**] soil areas  
g. [**very finely grained**] alluvial material  
h. the [**formerly self-sufficient**] rural feudal economy  
i. **naked, shameless, direct, brutal** exploitation  
j. a [**totally covered**], **uninsulated pig** house  
k. an [**usually thick**] **naturally-colored** cardigan

さらに次の現象がある。しばしばs所有格とof句は同じ用法を持っていて、競合する場合がある。その時名詞句が複雑になるとof句が使われる。つまり長くなると前置修飾から後置修飾に変わる(Biber et al (1999: 305))。

- (8) a. **The trustee's** appointment is effective from the date his appointment is certified by the chairman of the meeting.  
b. **Mr Walsh's** murder came just 11 hours after the UFF shot dead four Catholics and injured a fifth man.  
c. the recent appointment **of a part-time woman and two men**  
d. the withdrawal **of the service to the port's St Andrew's Road area**

また次の現象も前置修飾が短くなる傾向があることの証拠としてあげることができるであろう。

- (9) a. a **keen** student  
b. a student **keen on jazz**
- (10) a. a **fat** man

b. a man **fat around the waist**

以上の観察から英語は、前置修飾は短くなる傾向を持つことが明らかになった。

6. 後置修飾について調べてみよう。前置修飾要素が主として形容詞と名詞に限られるのに対し、さまざまな要素が後位修飾することができる。Biber et al. (1999: 575)によれば、

関係代名詞節

the job **I was doing last night**

ing 節

the imperious man **standing under the lamppost**

ed 節

a stationary element **held in position by the outer casing**

to 不定詞

enough money **to buy proper food**

one of the key contenders **to mount a rescue bid for Ferranti**

前置詞句

compensation **for emotional damage**

a phone **with a couple of buttons on it**

形容詞句

the extremely short duration varieties **common in India**

同格

the Indian captain, **Mohammed Azharuddin**

後置修飾は会話に置いては、あまり使われなく、逆に学術的な散文においてはきわめてよく使われる。そしてきわめて長くなる可能性をもつ。長い例をいくつか挙げてみる (Biber et al (1999: 607))。

(11) a. Mortality **among stocks of eggs stored outdoors in the ground**; eggs collected the following spring from a large number of natural habitats in the central part of the

**province**

**b. Further evidence of the association of winter egg mortality  
with sub-zero temperatures and snow cover**

次は子どもの歌である。いくらでも後に長くなっていくことができる。

- (12) This is the farmer sowing the corn,  
that kept the cock that crowed in the morn,  
that waked the priest all shaven and shorn,  
that married the man all tattered and torn,  
that kissed the maiden all forlorn,  
that milked the cow with the crumpled horn,  
that tossed the dog,  
that worried the cat,  
that killed the rat,  
that ate the malt,  
that lay in the house that Jack built.

以上の観察から判断すると、英語は後置修飾という手段を用いて名詞を長くするのである。

7. ここで1つの疑問が生じる。なぜ英語では、名詞句において前置修飾は短くて後置修飾は長くなることができるのか。この問題に取り掛かる前に、このことと関係するのではないかと思われる英語の事実がもう1つあることを指摘したい。階層関係を考えず線的に考えると名詞句において名詞が中心になりその前後に要素が並ぶ。文では、動詞が中心になると考えてみよう。そうすると前に主語がきて、うしろに目的語や補語がくることになる。これはChomsky (1970) からはじまるXバー理論とは、やや異なる。そこでは、動詞は動詞句の主要部であって、文の中心ではない。

このように考えると長さについて名詞句と文においてパラレルな現象が見られる。文においても動詞の前の要素つまり主語は短くなる傾向がある。そ

れとは対照的に動詞に続く要素はいくらでも長くなれる。ランダムに選んだ次の文章を見てみよう。動詞を太字で、主語を下線で示す。その前後の要素を比較するとすぐに明らかになる。

- (13) An interesting general correlation **appears** to be emerging between performance and grammars, as more data **become** available from each. There **are** patterns of preference in performance in languages possessing several structures of the same type. These same preferences **can also be found** in the fixed conventions of grammars, in languages with fewer structures of the same type. The performance data **come** from corpus studies and processing experiments, the grammatical data from typological samples and from the growing number of languages that have now been subjected to in-depth formal analysis.

(John A. Hawkins: *Efficiency and Complexity in Grammars*)

また英語では、主語を短くする手段を様々持つ。さまざまな外置化によりSを文末に移動して主語を短くする。太字の主語から移動した要素が[ ]で示してある。

- (14) **It** had been clear for some time [that the demands of the arms control process would increasingly dominate military planning].
- (15) **The time** was coming [for me to leave Frisco], or I would be crazy.
- (16) Toward the close of the Old English period **an event** occurred [which had greater effect on the English language than any other in the course of its history].

さらに Biber et al. (1999: 623) によれば、実際にコーパスにあたってみると、関係代名詞節が主語にくっついて主語を長くすることはあまりないという。整理すると、

- (17) 英語では、名詞および動詞の前では長い語の連鎖を避ける傾向がある。

8. もし名詞の前置修飾要素は長くなれないということが、英語だけでなく日本語にも当てはまるとすると、日本語では名詞に掛かる連体修飾要素は常に前置修飾であるので、あまり長くなることができないことになる。実際はどうであろうか。(1a)と(3a)の直訳で不自然だったものを実験的に短くしていくと、どうなるかを観察してみよう。

- (18) a. 日本には大した注意は一度も払ったことがなく、おそらく日本については無知で興味のないまま生涯をすごしていたであろう非常に多くのアメリカ人
- b. 日本には大した注意は一度も払ったことがない非常に多くのアメリカ人
- c. 日本には大した注意を一度も払ったことがないアメリカ人
- d. おそらく日本については無知で興味のないまま生涯をすごしていたであろう非常に多くのアメリカ人
- e. 日本については無知で興味のないまま生涯をすごしていた多くのアメリカ人
- f. 日本については興味のないまま生涯をすごしていたアメリカ人
- g. 日本には注意を一度も払ったことがなく、興味のないまま生涯をすごしていたアメリカ人
- (19) a. 現在、心にあるすべてのことを表現できる十分に発達した言語をもっているが、書く組織をもたない多くの種族
- b. 心にあることをすべて表現できる十分に発達した言語をもっている種族
- c. 心にあることをすべて表現できる言語をもっている種族
- d. 十分に発達した言語をもっている種族
- e. 十分に発達した言語をもっているが書く組織をもたない種族
- f. すべてのことを表現できる言語をもっているが、書く組織を持たない種族
- g. 言語はもっているが、書く組織をもたない種族

以上の例から、ほぼ短くするにつれて自然になるのが観察されるであろう。

それでは、実際の例を見てみよう。以下の例で\*がついたものは、寺村(1992)の例文を利用させていただいた。

- (20) a. . . . 四年前の秋のある晴れた日から身につけてしまった習慣  
(立原正秋『薪能』\*)
- b. ある精神病院へ曲がる横町 (芥川龍之介『齒車』\*)
- c. 女事務員が自殺した日大のフシギな經理 (『週刊朝日』\*)
- d. 新聞紙にくるんだお弁当 (武田百合子『ことばの食卓』)
- e. さっき境内を掃除にきたおばさん (武田百合子『ことばの食卓』)
- f. 蠟細工の見本のオムレツが実においしそうに飾ってあるオムレツ専門店 (武田百合子『ことばの食卓』)

次は連体修飾節の中に2つ以上の動詞を含む例である。

- (21) a. 書齋で頭をかかえ込み、もだえつつことばを紡ぎだす哲学者  
(驚田清一『「聴く」ことの力』)
- b. 自らの研究・論を成り立たせ、その正しさを示し保証する存在  
(仁田義雄「用例を利用する——文法研究の場合」)
- c. それらを十全に説明し証拠だてる的確で多様な用例  
(仁田義雄「用例を利用する——文法研究の場合」)
- d. 用例の多さを持って余すことなく、それを生かすことのできる、行き届いた観察 (仁田義雄「用例を利用する——文法研究の場合」)
- e. タメにはなるが全く面白くない本 (加藤典洋『語りの背景』)
- f. わたしがこれまで見たうちでもっとも心動かされた住宅  
(加藤典洋『語りの背景』)
- g. 時間つぶしにはなるがほとんど身体に残らない本  
(加藤典洋『語りの背景』)

次は比較的長いものである。

- (22) a. 柳宗悦以後の民芸問題をテーマに鳥取県の民芸運動について調べる学生の卒業論文 (加藤典洋『語りの背景』)

- b. 阪神・淡路大震災のあと、近くの小学校の体育館へかなり長く焚き出しに通っていたひとりの女性（鷺田清一『「聴く」ことの力』）
- c. リヨン特有の黄濁した霧がそろそろソーン、ローヌの両河から這いあがる季節（遠藤周作『白い人』\*）
- d. シェイクスピアの最晩年の頃に編集され、その死の翌年に出版された大きな辞典（渡部昇一「アングロ・サクソン文明落穂集」）

やはりそんなに長くならない。

ただし連体修飾節の種類によっては長くなることができる。

- (23) a. [銀髪を美しくまとめあげている小柄なおばあさんが、やたらと深く掘り下げられている狭軌道の地下鉄駅の階段を息子らしい立派な中年男性に背負われて降りていく] 場面  
（堀江敏幸「崩れを押しとどめること」）
- b. [平凡な主婦の<私>が、大型犬を放し飼いにするような近所の住人の「悪意」に触発され、その犬をエサで手はずけ、首輪をはずし、遠くに住む甥に、迷い込んだ犬として引き取らせようと企む] 話  
（川村 湊「文芸時評」）

「場面」や「話」のような名詞にかかる修飾節は、長くなっても不自然にはならない。これらの名詞の前には「という」を挿入できる。いわゆる英語の関係代名詞節ではなく同格の that 節に似ている。それゆえもう少し細かく調べる必要があるが、英語の関係代名詞節に対応する連体修飾節は長くない傾向を持つと判断してよいだろう。単なる語数を数えた長さなのか、構造も関与するのかさらに調べる必要があるが、それについては次の機会を捉えて考察してみたい。

9. 前述したように、英語では動詞の前でも長い連鎖は避けられる傾向があるのであるが、日本語ではどうであろうか。安西 (2000: 41-43) にもう一度戻ってみる。そこでは、アメリカの独立宣言の福沢諭吉の訳について柳父 (1983) の考えを述べている。(a) が原文で (b) が柳父による直訳、(c) が福

沢の訳である。

- (24) a. When in the course of human events it becomes necessary for one people to dissolve the political bands which have connected them with another, and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them, a decent respect to the opinions of mankind requires that they should declare the causes which impel them to the separation.
- b. 人類の諸事件の経過において、一国民が他の国に結びつけられていた政治的な絆を解き放ち、自然法と自然の神の法がその国民に付与した分離した平等の地位を、地上の列強の間で占めることがその国民にとって必要になる時、人類の世論にたいする当然の配慮は、彼らが分離せざるをえなかった理由を宣言すべきであるということ并要求する。
- c. 人生已むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てるの時に至ては、其建国する所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

柳父 (1983) による福沢の翻訳の分析は次のようである。下線は筆者。

文全体は、いくつかの句に切られ、はじめの一句を除いて、他はみな、[離れ]、[同列し]、[至ては]、「述べ」、「得ず」と、動詞、または動詞プラス付属語で終わっている。読者は、動詞が現れたところで、だいたいな意味を語る言葉が分り、思考の流れはひと区切りつく。ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて、その先へ読み進んで行ける。・・・・こういう面から見ると、西欧文は名詞を中心として展開してゆく構造であるのたいして、日本文は用言を中心として展開して行く構造であると言えよう。

10. この翻訳の分析を言語学の視点から眺めたものが次の中井・上田(2004)中の説明(広瀬友紀分担「第6章生成文法と統語解析」)である。下線は筆者。

日常の言語活動では、人は与えられた文をいつでも「最後までよく読んで」、あるいは、「よく聞いて」からおもむろに解釈を始めるとは考えにくいことを述べた。たとえば「山田が会計士にワイロを贈った」のような単語列を目にした場合、頭から順に「山田が会計士にワイロを」あたりまで読んだところで、「山田」、「会計士」、「ワイロ」という単語がどのような統語関係によって結びついているのかを確実に予測することはできない。たとえば(13)に挙げたような可能性があるであろう(カッコ内に文[S]レベルの構造を示す)。

- (13) a. 山田が会計士にワイロを贈った。  
([s山田が会計士にワイロを贈った])  
b. 山田が会計士にワイロを贈られた。  
([s山田が会計士にワイロを贈られた])  
c. 山田が会計士にワイロを贈らせた。  
([s山田が[s会計士にワイロを贈ら]せた])

日本語における大きな問題は、一つの文において、どのような意味役割を持つ、どのような要素が必要であるかという情報を担う動詞が最後の最後まで出現しないことである。最後の動詞部分によって、上の(13a)、(13b)、(13c)におけるそれぞれの要素はまったく違った役割を果たし、その内部構造もまったく異なる。

さらに仮に動詞が「贈った」であることがわかったとしても、その前にある要素すべてがその動詞と同じ文内の要素であるか確定できない。・・・  
・・・今読んでいる最中の文が埋め込み文を含むかどうか、含むとしたらその境界はどこにあるのかは、文がいくら長くても文の最後まで読ま

ないと明らかにならないことが多い。これらのような、途中までだけ読んだ時点では、複数の統語構造の可能性が考えられてしまう文は、一時的に曖昧(多義)である・・・。

以上のことから推理すると、書き手および話し手はできるだけ曖昧性を生じること避けるようにするであろう。その曖昧性の非常に大きい原因は日本語においては、動詞がなかなか出てこないことである。そうするとその動詞に掛かる要素をできるだけ短くしようとする原理が働くに違いない。その観点から福沢訳を見てみよう。動詞を四角で囲み、それに掛かる要素を下線部で示す。

人生已むを得ざるの時運にて、一族の人民、他国の政治を離れ、物理天道の自然に従って世界中の万国と同列し、別に一国を建てるの時に至ては、其建国する所以の原因を述べ、人心を察して之を布告せざるを得ず。

動詞に掛かる要素はとても短いことがわかる。

次は安西の訳である。

歴史の経過にともなって、ある国民が政治的絆によって他国に併属されてきたことを嫌い、これを解消して、自然および自然を創った神の法に従い、当然の権利として独立し、世界の列強のあいだに伍して平等の地位を占めざるをえなくなった時、人類の輿論にしかるべき敬意をはらうならば、なぜ独立するほかないか、その理由を、ひろく内外に宣言しなければならない。

安西は訳文に加えた工夫を説明しているが、そのうちの1つが、原文にない動詞をいくつか付け加えたことである。そのことによって、動詞に掛かる要

素はそれだけ短くなっている。

このことは日本語が動詞が最後に来る SOV 言語であることと密接に関係する。一方 SVO 言語である英語では、動詞の前にあるのは、主語のみであるので、主語のみが短くなる傾向がある。動詞の後の要素は長くてもかまわない。

11. これを名詞句についても当て嵌めれば、主要部になる名詞ができるだけ早く出現することが望ましいことになろう。つまりそれに掛かる前置修飾要素はできるだけ短いことが望ましい。それゆえ英語において前置修飾要素は短くなる傾向があるのに対して、後置修飾要素が長くても差し支えないのである。一方日本語は主要部である名詞は最後の位置を占めるので、前置修飾のみしかできない。そしてすでに明らかにしたようにできるだけ短くなる傾向と辻褄があうのである。

12. このように考えると日本語と英語では文を長くしていくメカニズムは異なっているのではないかと予想できる。日本語においては、中心になる名詞と動詞が最後にあり、名詞句も文(節)も長くできないので、文(節)をいくつも繋げていくことによって文を長くしていくであろう。実例で検証してみよう。

(25) a. ぼくは羊の肉が好きなので、/この鍋ができると/そんな観察も取材の余裕もなく、/ただもう「うまいうまい、ああうまい」といつて食っていたので、/そのようなしきたりも仕組みも何も知らなかった。  
(椎名誠「クソ食う人々」)

b. いつ頃から車に冷暖房の装置が付いたのかは/調べて見なければ/解らないが/冷房が戦後であるのは/確かなことのように/暖房の方は戦前からあっても/その装置がしてあるのは/役所などの大きな車に限られていた。  
(吉田健一『東京の昔』)

c. それでも、数少ない畏友たちの援助にすがりながら/翻訳書の幾ば

くかを苦勞して咀嚼し、/人並みの人生経験を積み、/それらを糾  
合せせることによって、/人間というこの不可思議な存在に対する  
解明の糸口だけはつかんでいるという/ささやかな自負がないわけ  
ではない。 (小浜逸郎『人はなぜ働かなくてはならないのか』)

それに対して英語ではすでに述べたように名詞句を長くしていくことが  
できる。また動詞の後の要素を長くできるので1つの節そのものも長く出来る。  
そして埋め込みという手段を頻繁に用いる。しかし日本語と異なり、節はせ  
いぜい二つの節を接続詞で繋いでいくのである。このことは、(13)を見てみ  
ると明らかである。これについては、さらに機会を見付けてくわしく比較を  
してみたい。

13. 以上、長さという視点から日本語と英語を比較してみた。まだほんの  
入り口にいるにすぎない。他の言語からの情報を得ることによって、人間の言  
語の処理の仕方についての探索のひとつの手がかりになればよいと思ってい  
る。機会を見付けてさらに考察を続けていくつもりである。不十分な点、誤  
解をしている点があったら修正しつつ検討をしたい。

## 参考文献

- 安西徹雄 (1995) 『英文翻訳術』 筑摩書房.
- 安西徹雄 (2000) 『英語の発想』 筑摩書房.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," *Reading in English Transformational Grammar*, ed. by R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, 184-221, Ginn and Co.
- 福地 肇 (1995) 『英語らしい表現と英文法』 研究社出版.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房.
- 川平芳夫 (2004) 「日英語の名詞修飾節の対照：パラメーターによる分析」 佐藤滋・堀江薫・中村渉編 (2004) 『対照言語学の新展開』 103-123、ひつじ書房.
- 小正幸造 (1989) 『すぐれた英語翻訳への道——創造する翻訳者が使う技法集——』 大修館書店.
- Matsumoto, Yoshiko (1989) *Grammar and Semantics of Adnominal Clauses in Japanese*, Doctoral dissertation, University of California, Berkeley.
- Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- 中井 悟・上田雅信編 (2004) 『生成文法を学ぶ人のために』 世界思想社.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集I—日本語文法編—』 くろしお出版.
- 外山滋比古 (1972) 『日本語の論理』 中央公論社.
- 柳父 章 (1983) 『比較日本語論』 日本翻訳家養成センター.